

## 母、小幡信子の戦争体験 聞き書き

母の100歳の誕生日を迎えるに当たり、人生の中で特別な意味を持つ戦時中の体験談を、ザックリと書き留めてみようと思い立ちました。

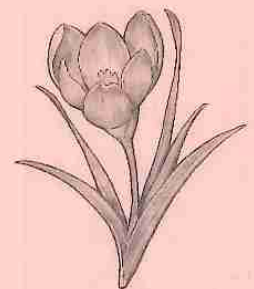
看護婦だった母が戦地に赴いたのは第二次大戦も末期のことです。大戦中最悪の作戦といわれたインパール作戦の前に、多くの犠牲者を出しながら、泰緬鉄道を建設し、銃後の守りとして、ビルマ国民の懐柔政策として、首都ラングーンに、市民病院を建設、その運営を慶応大学付属病院に委託しました。大学側は大反対だったそうですが、拒否しきれずスタッフが選抜され配属されました。

インパール作戦の前は、比較のおだやかで国にいるより恵まれた生活だったようです。同じ病院からスタッフが赴いたせいか診療内容は良好で、病院内だけでなく、少数民族の村々へ巡回診療にも行っていたそうです。カレン族の村々だったのか母は片言のカレン語を記憶していました。この頃の母が、特に理不尽に思ったのは、同じビルマ国民同士、民族によって厳しい身分差別があったことだそうです。ビルマ人、インド人、少数民族、民族ごとに差別することによりいがみ合わせ、宗主国（英国）が管理統治しやすくするためです。

平穏な日々はすぐに終わり、インパール作戦が始まった後は凄惨を極めたそうです。やがてラングーンにイギリス軍が侵攻してくることがわかり、タイに撤退することが決まったのですが、軍は病院の備品や薬などを全部、破壊するよう命令し、泣く泣く土中に埋めたそうです。赤十字の旗をたてた船で、病院スタッフたちは一路タイのバンコクに向かうのですが、途中爆撃されました。船中で母は二人の同僚看護婦と長椅子に座っていたのですが、母の両脇にいた同僚が被弾し亡くなったそうです。母は手にかすかに残るやけどの跡を眺めながら何度も、子どもだった私たちに、しみりと語っていたのを思い出します。

母は、看護婦の仕事をおそらく一生続けていくつもりだったのだと思います。ある時、母に「どうして病院を辞めてしまったの？」と聞いたことがあります。最初は口ごもっていましたが、「手術室のチーフになれと言われたからよ。それだけは、どうしても嫌だったのよ」。経験は豊かだったのでしょうが、毎日のように凄惨な思い出がよみがえって来るのでは、繊細な母の神経は持たなかったと思われます。

かくして母は病院を去り、友人の兄だった父と結婚し、今の私たちがここにおります



イラスト／細井美風

聞き取り：仲野万里子（長女）